高校古典における創作活動の有用性

教科教育高度化分野（22821951）阿　部　は　る　な

古典を中心に創作活動の実践を行ったところ，心情や描写に注目して読む，自分の解釈の伝わる表現に表す，創作活動に興味・関心・意欲を持つという姿が見られた。創作活動は生徒の古典に対する自由な考えを尊重しながら，心情や時代背景，情景描写などに注目して，ものの見方・考え方や言葉による見方・考え方を働かせて読み，書く力を養っている。創作への意欲だけに留まらず，創作を通して古典の魅力を感じる生徒もおり，我が国の言語文化に親しむ態度を育てることにもつながっている。

［キーワード］　高校古典，創作活動，言語文化，国語教育

１　問題と目的

(1)高校古典の授業の現状と課題

2016 年 12 月の中央教育審議会答申で高等学校の国語科の課題を次のように指摘している。

> 高等学校では，教材への依存度が高く，主体的な言語活動が軽視され，依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり，授業改善に取り組む必要がある。また，文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること，多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること，国語の語彙の構造や特徴を理解すること，古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている。

答申では現在の教師主導の講義型の授業について課題を述べている。また自分の考えを根拠づけて説明することと古典の学習に対する生徒の意欲の低さを指摘している。この内容から高校国語の授業では生徒の主体的な活動，自分の考えを表現する活動，そして生徒が意欲を持って取り組むことのできる古典学習が求められていると言える。

今まで経験してきた授業の様子を振り返ってみると，講義型が主である。予習で教科書本文をノートに写させ，重要語句について調べてくることを課し，授業では教師主体で文章を最初から最後まで文法事項を説明しながら進めていく。授業は教師が教材に向かい，それを生徒は横から眺めるような，そんな印象さえある。生徒にとって古典作品は遠い存在であり，難しく，親しみを持ちにくいものであると思っている生徒は少なくない。小，中学校の教育実習では，アクティブラーニングや学び合いといった生徒主体の学習活動を行っている様子が見られた。一方で，高校での今までの経験と新しい学習指導要領が適用されて間もないことを考えると，現在でも教師主導の授業スタイルが散見されるだろう。

高校国語の授業の問題点を古典に着目し，古典学習の方法の一つとして創作活動を用いた学習を検討することで，生徒主体で，生徒の解釈を活かし，生徒が古典を楽しみながら学ぶことを目指す。

２　先行研究の調査

「言語文化教育の道しるべ」（浅田 2018）で高等学校学習指導要領の新科目としての「言語文化」に限らず，国語教育・言語教育で扱われる全ての事柄を「文化」の切り口から「言語文化」と表している。その様々な「言語文化」について浅田は様々な実践を踏まえて言語文化教育について述べている。その中で「言語の教育」として「古典を楽しむ」授業を作ることについて以下に引用する。

「古典を読む際，例えば装束描写や情景描写によって，場面を生き生きと想像したり，人物像を総合的に考えるといった，どちらかと言えば内容本位のことも重要であり，梶原（1981）[1] もそういった趣旨のことを述べている。そこに「言語の教育」という観点を盛り込むならば，梶原の言う「言葉や表現の重み」という，内容に表現が深く関わっている事柄を，もっと重視してよい。時には「深読み」になってしまうことがあったとしても，生徒が言葉の重みを読む観点を自分なりに身につけ，「自分に引き寄せて理解をする」ことができるならば，これはまさに「古典を楽しむ」

読み方になるはずであり，小手先のテクニックで「楽しませる」こととは次元が違ってくる。」（浅田 2018）

浅田は自身の「徒然草」の「奥山に猫またといふもの」における連歌法師の「猫またよや，よや」という「よや，よや」の解釈について述べる。浅田は連歌法師の言いようのない恐怖感を読み取る方向で話を進めるとこの部分に恐怖感を認める生徒が多くいた。このことについて浅田は「この読みの妥当性はひとまず措くとしても，こうした読み方ができるということは，確実に自分なりに古典の表現を読み味わっていることになる。」と評する。このような味読を行うための観点を作品の内容を考慮して生徒に示していくことで，生徒は単なる読解力・解釈力を越えた，自分なりの鑑賞力を身につけることができるとし，「これこそが生徒が生涯にわたり『古典を楽しむ』ことに繋がる」とまとめている。

浅田の考えは「古典を楽しみながら学ぶ」ということについて一つの方法を示している。創作活動では，生徒の解釈を重視し，深読みも可として生徒が感じた内容を踏まえて行わせる。これは描写から想像したり，人物像を総合的に判断したりするという内容本位の重視，そして言葉の表現に注目する読みと関連がある。このことから創作活動は「言語の教育」として古典を楽しむことにつながるのではないかと考えられる。

３　授業実践

創作活動を行うことで生徒がどのような学習を行い，どのような効果や困難が見られるか，A 高校と B 中学校で授業実践を行い検討した。実践では生徒の学習の様子と，実際に作った創作物，そして授業前後で行うアンケートによって，創作活動の効果と困難について調べる。アンケートは五件法で行った。主に，文章を読むときに，登場人物の描写に注意して読んでいる/読んだ，文章を読むときに情景の描写に注意して読んでいる/読んだ，文章を読むときに想像力を働かせて読んでいる/読んだ，文章を読んで表現の効果について考えることができる/できた，の主に四つを共通の質問事項とした。実践について以下に述べる。

⑴　A 高校での実践

3 学年 1 学級 15 人を対象に授業実践を行った。「平家物語」「枕草子」の単元を扱い，それぞれ種類の違う創作活動を行い，生徒の学習の様子を観察した。普段はグループでの活動はあまり行っておらず，ペアで音読したり話し合ったりしている。古典文法や語句の定着度は差が大きい。

①平家物語「壇ノ浦」授業実践：ア

平家物語は鎌倉後期に成立した軍記物である。その中の「壇ノ浦」は平家滅亡の場面であり，幼い安徳天皇を抱いて入水する二位殿の悲しみや孫への愛情，平家の武士である知盛の武士として潔い最後を迎えようとする姿が描かれている。創作活動として登場人物を一人選び，その登場人物の心情がわかるように自分版の「壇ノ浦」を書く活動を行った。心情を推察し，独自の解釈を踏まえて創作することで平家物語の世界観に触れ，内容を深く読み込むことができると考えた。

〇単元計画（全 6 時間）

時間	学習内容
1	平家物語について復習した後，本文を読む。
2，3	現代語訳をする。
4	二位殿の心情や人柄が表れている表現や行動を探す。
5	登場人物の心情を解釈して，心情が伝わるように壇ノ浦を書く。
6	作品を交流する。

〇生徒の活動の様子

最後に自分の解釈を活かした「壇ノ浦」を創作することを伝え，見通しをもって活動に取り組んだ。4 時間目で創作に向けて登場人物の一人である二位殿の心情に注目する授業を行った。現代語訳まではグループで協力する形で行い，全員の理解度を高めたが，自分の解釈を大切にするため一人での活動を行った。個人の活動ではあるが，周りと相談してもよいと伝え，生徒同士自由に交流できるようにした。ワークシートを渡し，二位殿の心情が表れている部分に傍線を引きながら，そこからどのような心情や人柄が考えられるか検討させた。すぐに線を引き始めて分析する生徒もいれば，なかなか線が引けない生徒，線は引けているがそこからどんな心情が考えられるかが分からない生徒など様々であった。生徒達は心情が表れている部分として，以下の部分に線を引いている生徒が多い。

・「我が身は女なりとも～」のような二位殿の台詞
・「涙を抑えて申されけるは～」「～と泣く泣く申させ給ひければ」のような台詞前後の二位殿の様子がわかる文
・「日ごろ思しめしまうけたることなれば」のような登場人物の考えがわかる文

5時間目では二位殿に限らず自分の注目する登場人物を選んで，その人物の心情を解釈し，心情が伝わるようにクロムブックを用いて，自分版の「壇ノ浦」を作るという課題を出した。多くの生徒は二位殿を選び，前回の学習を確認しながら書いていたが，その他の登場人物を選んでいる生徒もいた。活動は個人で行った。すらすらと書き始める生徒もいれば，何を書けば良いのか分からずなかなか活動に取り組めない生徒もいた。一時間では終わらなかったため，6時間目の前半も創作の時間を取り，後半で作品の交流を行った。Google classroom で提出させたので，生徒の作品をファイルにまとめて共有し，生徒が自由に見られるようにした。グループでは自分たちの班員の作品を各自のクロムブックで見ながら感想を言い合ったり，自分たちの班以外のクラスメイトの作品もみながら楽しく交流したりしている姿が見られた。

②枕草子「初めて宮に参りたるころ」授業実践：イ

清少納言の枕草子の単元を扱った。「初めて宮に参りたるころ」は自信家と思われがちな清少納言の意外な一面と，中宮定子のこまやかな気遣いが読み取れる内容となっている。作者である清少納言の視点から書かれているため，清少納言の心情は想像に難くない。本単元では，実際に劇にしたときに見ている人が内容や登場人物の心情を理解できるような脚本を作るという活動を行った。登場人物の心情に迫り，古典を身近に感じると共に，古典で重要な主語の意識にもつながるのではないかと考えた。

○単元計画（全4時間）

時間	学習内容
1	枕草子について復習し，本文を読む。
2	現代語訳をする。
3，4	現代語訳で内容を確認してグループで脚本を書く。

○生徒の活動の様子

脚本作りはグループで行った。「壇ノ浦」の実践でなかなか書き込むことができずにいた生徒もグループの中では他の生徒の意見を聞いたり，表現について自分の意見を述べたりする姿が見られた。脚本を作る中で，生徒達は登場人物の背景や心情，本文に出てきた言葉に疑問を持ちながら，グループで検討したり，調べたりして活動を行っていた。

○アンケートの結果

平家物語の授業前にアンケートを取り，平家物語と枕草子の授業後にそれぞれアンケートを取った。生徒 15 人中，平家物語は 15 人，枕草子では 13 人が回答している。授業前後の結果を以下に示す。

表１　実践ア・イのアンケート結果

	そう思う	ややそう思う	わからない	ややそう思わない	思わない
登場人物の描写に注意して読んでいる	3	10	2	0	0
平家物語：授業後	**15**	**0**	**0**	**0**	**0**
枕草子：授業後	**11**	**2**	**0**	**0**	**0**
情景の描写に注意して読んでいる	1	10	3	1	0
平家物語：授業後	**15**	**0**	**0**	**0**	**0**
枕草子：授業後	**11**	**2**	**0**	**0**	**0**
想像力を働かせて読んでいる	7	6	1	1	0
平家物語：授業後	**15**	**0**	**0**	**0**	**0**
枕草子：授業後	**12**	**1**	**0**	**0**	**0**
表現の効果について考えることができる	1	10	2	1	1
平家物語：授業後	**15**	**0**	**0**	**0**	**0**
枕草子：授業後	**11**	**2**	**0**	**0**	**0**

勉強に意欲的な生徒が多いため，普段から心情や情景などを意識して読んでいる。そのため授業前アンケートでは「ややそう思う」と答えた生徒が全ての質問で一番である。平家物語の授業後に行ったアンケートでは全ての生徒が「そう思う」と回答している。枕草子の授業ではほとんどの生徒が「そう思う」と回答し，一部生徒で「ややそう思う」と答えている。

⑵ B中学校での実践

1学年1学級 34 人を対象に授業実践を行った。中学校では古典の単元が少ないため，物語文である「星の花の降るころに」での創作活動を行った。古典ではないが，創作活動の効果を他の実践と比較していく。加えて中学校で初めての漢文教材である「今に活きる言葉『矛盾』」の単元で体験文の創作を行った。

①「星の花の降るころに」授業実践：ウ

安東みきえ作「星の花の降るころに」は中学校1年生で2回目の物語文の学習である。主人公の「私」は疎遠になってしまった「夏実」と仲直りを図るが失敗し落ち込む。しかしクラスメイトの「戸部君」と思い出の銀木犀を通して，これからの生き方について自分の決意を新たにする話である。生徒と同じ中学一年生が登場人物であり，生徒達は共感的に読みやすい作品である。

○単元計画（全6時間）

時間	学習内容
1	作品を読み，初読の感想を書く。
2	「私」と登場人物の関係を読み取る。
3	「銀木犀」について「私」の捉え方の変化を描写から考える。
4，5	物語の続きを創作する。
6	作品を交流する。

○生徒の活動の様子

最終的に創作を行うことを伝え，創作に向けて内容読解に取り組んでいく形とした。創作に向けて物語の理解を深めていく過程で，3時間目の「銀木犀」の捉え方の変化を考える際はグループでの活動を行い，ホワイトボードに書いた各グループの考えを黒板にまとめたこの活動を通して生徒は銀木犀が私にとって夏実との仲をつなぐものから，自分を成長させる，新たな出会いへ導くものとして変わったという捉えができた。この銀木犀の捉え方は生徒の創作文の中でも活かされた。

創作活動は次のような内容で行った。

・「私」のその後を学習内容を踏まえて想像し，創作する。
・その後については数カ月，数年後など生徒が自由に設定してよい。
・字数制限なし。

創作の作成例を渡すと例に引っ張られてしまうので何も見ずに書きたいという生徒もいる一方で，例がないと創作のイメージが湧きにくい生徒もいる。そこで教師の作成した創作文を黒板に掲示し，必要な生徒が見に来る形にした。なかなか書き始められない生徒の中には，最後の場面からどれくらい経った時間軸での話を書くかは考えているが，その内容が考えられない生徒と，いつのことを書けば良いのか，どう書けばいいのか全くイメージが湧いてこないという生徒がいた。前者の生徒には時間の設定の次に場所，人と設定する項目を挙げて考えさせた。後者の生徒には他の生徒の時間設定をたとえとして提示しながら，いつのことを書いてみたいかという本人の興味を引出すように努めた。しかし後者の生徒はこの手立てで時間設定を考えることができても，具体的に想像して書き進めていくのが困難であった。最終的に授業に出席した32人中28人が作品を提出した。6時間目は班で自分の書いた作品を回して，自分以外の作品を読み，表現が良いと思ったところに線を引いて返すという形で交流を行った。

○アンケートの結果

授業前アンケート回答者32人，授業後アンケート回答者 31 人の結果と授業前後の変化を以下の表に示す。

表2　実践ウのアンケート結果

	そう思う	ややそう思う	わからない	ややそう思わない	思わない
登場人物の描写に注意して読んでいる	7	14	6	5	0
授業後	**10**	**12**	**5**	**2**	**2**
情景の描写に注意して読んでいる	8	11	7	6	0
授業後	**10**	**9**	**8**	**2**	**2**
想像力を働かせて読んでいる	13	9	5	4	1
授業後	**16**	**6**	**4**	**3**	**2**
表現の効果について考えることができる	5	8	10	7	2
授業後	**8**	**13**	**6**	**2**	**2**

文章を読むときに意識することについての項目全てで「そう思う」と答えた生徒の数が増えている。全体的にポイントが上がっており，「ややそう思わない」→「わからない」や「わからない」→「ややそう思う」に変化している。一方で今回の学習を経て「思わない」と回答した数も増えている。

②今に活きる言葉「矛盾」授業実践：エ

中学校で初めての漢文教材である。教科書は書き下し文で書かれているが，漢文の独特の言い回しや歴史的仮名遣いに生徒は苦手意識を感じやすい。実践ア～ウと違い，描写や心情理解ではなく，故事成語を理解し，自分の表現として使っていく手段として創作を行った。本実践では「矛盾」の内容を読み，矛盾に当てはまる自分の体験談と，「矛盾」以外の好きな故事成語を選んで体験談を書くという創作活動を行った。

○単元計画（全3時間）

時間	学習内容
1	漢文の訓読のルールを理解する
2	音読を通して漢文のリズムや独特の言い回しに親しむ。故事成語の意味を調べる。
3	矛盾と好きな故事成語にふさわしい体験談を書く。

○生徒の活動の様子

漢文に初めて触れるため，訓読のルールについては難しいという声が多く上がった。「矛盾」という言葉自体は生徒も知っており，矛盾の内容自体も現代語訳と挿絵を読み容易に理解ができていた。故事成語の意味調べも積極的に行っており，元々聞いたことのある言葉が多いためか意欲は高

いように感じた。しかし体験談を書く活動を行ったところ，なかなか書くことができずにいた。書いているものの矛盾の内容にそぐわないものだったり，そもそもどう書けばいいのか分からなかったりと困難であった。適した体験談を書いている生徒の作品を紹介して，体験談のイメージを持たせて，好きな故事成語を使った体験談を書くように指示したが，こちらもほとんどの生徒が書くことができなかった。

矛盾の単元では文章を読む際の意識を考えさせる授業ではなかったためこれまでの実践で使ったアンケートを行わなかった。代わりに漢文について感じたことや，体験談を書く活動についての感想を書かせた。時間が無かったこともあり，感想まで書けた生徒は少なく，書けなかった生徒に口頭でどうだったか聞いてみると「難しかった」という声が多かった。

４　考察

本研究では「創作活動を用いた学習を検討することで，生徒主体で，生徒の解釈を活かし，生徒が古典を楽しみながら学ぶ」ことを目指して行った。実践からは主にこのような生徒の姿が見られた。

⑴心情や描写に注目して読む姿

「読む」とは内容を理解するだけではなく，深読みすること，行間を読むこといった解釈の観点が含まれる。これについてはアンケートの結果から生徒自身の意識について考えることができる。実践ア，イでは全員が心情や描写に注目して読んだかという質問に対して「そう思う」「ややそう思う」と回答しており，実践ウでも全体的にポイントが向上していた。このことから多くの生徒が自身の意識として創作活動を用いた学習を終えて，心情や描写に注目して読むことができたと感じていることがわかる。生徒によっては求めているレベルの創作活動を行うことができなかった生徒も「そう思う」に回答している。特に実践アでは全員が「そう思う」に回答していた。これは苦労している生徒ほど教科書や本文シートとじっくり向き合いながらしながら取り組んだため「本文をしっかりと読んだ」という意識が強く，このように回答しているのではないかと考える。

活動の様子として，実践アでは心情がわかるような自分版「壇ノ浦」を作るにあたって，登場人物の台詞の前後の動きに注目したり，その動きからどのような心情だったのかを読み取ろうとしたりする生徒が多くいた。T さんは本文には書かれていない二位殿が清盛の妻であるという情報を踏まえてこのような創作を行っている。

【作品】T さん
「私は女であるが、敵に首を取られることはない。」無機質に音をたてる波が船を揺らす 。いくら女でも宿敵である源氏に討たれるわけにはいかない。そう思いながら向こうの源氏を見て闘志を示す。
「帝のお供に参上するのだ。忠誠を尽くし申し上げなさる方々は、急いでお続きなさい。」
女ながらも源氏に立ち向かうその姿は、勇ましく、主人、清盛の分身を思い起こさせるかのように部下を従順に従える。不利な状況であっても、源氏に首を取られないその負けず嫌いさやプライドは、清盛に似たのかもしれない。　今年で8歳だという安徳天皇は容貌がうるわしく、年齢の程よりもはるかに大人びている。そんな安徳天皇も途方に暮れたご様子で、尼御前にかかえられ、船端にたつ。
安徳天皇が少し戸惑った顔 でロを開く。
「尼御前よ、私をどこへ連れていこうとするのか?」尼御前は目からこぼれ落ちそうな涙を抑えて言う。
「ご存じではいらっしゃらないのですね。極楽浄土といって素晴らしいところへお連れ申し上げますよ。」そう言って、尼御前は涙を抑えることはできなかった。
【作者コメント】
女性という立場にも関わらず、清盛と同じくらい源氏に対しての闘志と平氏としての威厳を見せる尼御前の勇敢さを表現しました

本文の内容に限らず，登場人物の背景についても人柄のイメージの材料としていた。これは浅田（2018）の人物像を総合的に考える内容本位の重視ができていると考えられる。最後の感想では「源氏物語を一回勉強した上で，自分の想像力を働かせて創作し，授業を受けてる時よりも物語の情景がより鮮明に想像できました。登場人物になりきって，場面ごとに本人がなにを考えているか，思っているかを考えることが大事だと思いました。」と述べている。今回の学習は平家物語であったが，おそらく書き間違えたものと想像する。内容を理解するための授業を受けているときよりも自分で想像力を働かせて書いたことで情景をより想像できていると述べており，創作活動がこの生徒にとって物語の理解に役立ったと考えることができる。

実践イでは脚本作りでグループの中で交わされた会話に注目した。設定を考えるためにグループで分からない言葉を調べて内容を改めて理解し直したり，心情の解釈を話し合ったりするようすがみられた。中宮定子に目を掛けられる清少納言の心情を考えていたグループでは，少納言が定子に構われるのが嫌だったのではないかということで以下のような意見を交わしていた。

生徒 A「こんなに構われるの嫌じゃない？」

生徒Ｂ「でも適当にあしらわれるのも嫌じゃない？」
生徒Ａ「でも（有名女優）と正面で話してみって言われたら無理でしょ！」
生徒Ｂ「うわ，それは無理だわ」
生徒Ａ「だから定子は（有名女優）なわけ」
生徒Ｃ「斜めからも無理だもんね」
生徒Ａ「しかもめっちゃ話しかけてくるんだ！だから（有名女優）を遠くから見てたらかわいい～ってなるけど，実際に話すのは無理」
生徒Ｂ「じゃあ『ちょ，ホントに人間？』にしよ」

このやりとりでは生徒が定子を有名女優にたとえて，清少納言の心情を自分たちがわかりやすい形で想像し，解釈していた。これは脚本作りという登場人物の心情を意識させる活動で，心情を考える必要感から生まれたやりとりではないかと考えられる。このグループには壇ノ浦の創作で現代人の感覚で書いたとコメントを残していた生徒が入っていたため，自分たちらしく書く意識が強いグループであったと考えられる。

生徒達は創作にあたって内容を捉え直したり，作品の成立した時代の文化的な背景を理解したりして内容を解釈している。また書いていない事柄について叙述を基に捉えた内容から，自分の知識や経験などと関係づけながら補い，自身の作品世界を構築している。このように創作活動を通して，生徒は作品を成立した時代の文化を理解し総合的に捉え，ものの見方，感じ方，考え方を踏まえて内容を解釈する力を養っていると考える。

⑵自分の解釈が伝わるように表現しようとする姿

実践アでは自分版「壇ノ浦」を作る中で登場人物の台詞を自分が伝わりやすいと考えた表現に表すことや，書かれていない心情をどう表現するかという生徒の工夫が創作からうかがえた。ある生徒は現代語訳で「帝の御供として参るのである」と訳していたのを「私は最後まで運命をともにして死にます。」とした。そして「『波の下にも都がありますよ』と慰め申し上げて」という台詞を「『波の下にもきっと今まで暮らしていたような素晴らしい都がございますよ。』と幼い帝だけでなく二位殿自身も，死への恐怖から海に入ることを恐れないよう自分を鼓舞するように慰め申し上げた。」と書いている。この生徒は「平家が滅亡するまでの覚悟や葛藤，死への恐怖などの心情を表現できるように書きました。」という作者コメントをしている。「運命をともにする」や「自分を鼓舞するように」というような表現はあえて生徒がその言葉を選んでいるのであり，特に「自分を鼓舞する」という表現は「恐怖」という言葉を使わずに恐怖を表そうとしたことがうかがえる。

実践イでは少納言だけでなく定子の描写についてもユニークな表現をしているグループがあった。脚本を一部抜粋する。

少納言
（緊張で今にも涙が出てしまいそう…。やっぱり来るんじゃなかった、もう帰りたい寝たい無理。）
ナレーター
緊張している様子の少納言。そこに、中宮様が優しく話しかける。
中宮様
「この絵、素晴らしいものだと思わないかい?」
ナレーター
少納言に話しかける中宮様は、ガラスの靴を少納言に履かせる、王子様のような雰囲気を漂わせている。その王子様に少納言はときめき、さらに顔を赤らめてしまう。王子様は美しいけれど、ふと我に返り自分の容姿を思い出す。
少納言
（最悪すぎる…髪はチリチリだし、変な顔してるかもだし…。恥ずかしすぎる…。）

このグループは少納言の態度や心情について「緊張」という言葉や心の内の台詞にある「帰りたい寝たい無理」といった途切れない言葉の羅列で少納言の嫌になっている様子をわかりやすく表している。また定子の少納言に対する優しい態度を「王子様」としている。これは少納言目線から書かれた定子の素晴らしい様を「王子様」という表現で表している。この班には壇ノ浦の二位殿の様子を「男前」と評した生徒が入っていて，堂々とした女性や素晴らしい女性を女性目線から見て魅力的な様子であることを分かりやすい言葉を選んでいると考えられる。

生徒達は創作活動で自分の経験や知識から自分の解釈が効果的に伝わるように言葉を選んだり，構成や展開を工夫したりとしている。創作活動を通して言葉による見方・考え方を働かせて読み，そして表現の仕方を工夫しながら書く力を養っていると考えられる。

⑶創作活動への興味・関心・意欲を持って創作活動に取り組む姿

興味・関心・意欲を持って取り組む姿は実践ア～ウに共通して見られる。実践アでは創作活動について「自分自身の解釈で内容を落とし込むことができ，また，書いていて楽しかった」「ただ内

容を理解するだけでなく，自分で実際に物語を作ったり，その人になりきる機会を作ることによって古典の物語の魅力に気づけたと思いました。」などの感想が寄せられた。半数以上の生徒が感想の中で「楽しかった」「面白かった」と感じている。また創作を行って交流をしていると，「今回知盛視点で書いたけど，女房視点で書いても面白くない？」と話している生徒もいた。この生徒は現代人の感覚を意識して創作を行った生徒で，視点を変えるとまた別の面白さが生まれるのではないかと，前向きに創作について捉えていることがうかがえる。

実践イでは脚本作りにあたって，表現が難しかったり，どんなものか分からなかったりした時に積極的に調べようとする姿があった。分からない言葉が出てくるとすぐに調べようとしている場面が多く見られた。他にも主人公となる清少納言について使っている ICT を用いて結婚していたことや，離婚していたことなどを自ら調べ，登場人物の理解を広げようとしていた。人物理解を進めようとした際に，教科書の内容だけでは足りないとして自ら情報を集めようとするのは，脚本という自分の解釈を活かせる活動だからこそではないかと考える。

実践ウでは，多くの生徒が面白いものを書きたいという意識が強かった。生徒の作品を一つ紹介する。

【作品】S さん
「新社会人の春」
ちょっとした用事の帰り，あの銀木犀の公園に立ち寄った。久しぶりに来たこの公園は随分様変わりしていた。昔は少なかった遊具は沢山置かれているし，人が多くてにぎやかだ。それでも銀木犀の木は，昔と変わらずそこにあった。この木を見ると，懐かしむ気持ちと共に，昔の思い出がよみがえる。夏実とは結局疎遠になってしまったが，今はどうしているかな。元気だろうか。そんなことを思いながら公園を後にする。私はこの春，社会人として新たな一歩を踏み出す。不安な気持ちもあるが，きっと大丈夫だと思う。私は後ろを振り返ることなく前へと歩を進めた。
【作者コメント】
続き物語をこのような内容にしたのはただ夏実と「私」が仲直りするだけではつまらないなと思ったのと，大人になった主人公を書きたいと思ったからです。先生の書いた物に寄ってしまったのですがどうか見のがしてください。

S さんは活動を始める前から，教師の作品を見たらオリジナリティが出せなくなりそうだと，参考にするのに抵抗があった生徒だった。結局書くのが難しく少し教師の作品を見てから取りかかっていた。コメントにあるように，教師の作品に似てしまったと自分の作品を自分で評価し，似た作品を作ったことに満足していないことがうかがえる。また自分の考えをこれはつまらないからこうしたい，と面白さを追求しようという意識も見られる。生徒によっては主人公が死んでしまうような突飛な内容を書いている生徒もいたのだが，そのような生徒のコメントには「そのまま書いたらつまらないと思って」と書いてあり，自分なりの面白さを追求しようとした結果と考えられる。解釈が物語との整合性を有しているかについて生徒自身で評価する必要があるが，活動に対する意欲の面では評価したい。また教師からは何も指示していないにも関わらず，周りと内容を相談する中でリレー形式で物語を作ろうと話し合い，四人で合同作品を書いた生徒達もいた。生徒の感想でも「面白かった」「楽しかった」という感想が多く寄せられた。「次があれば友達のを参考にしてみたい。」など，創作そのものについて意欲的な感想もあった。

これらの実践結果から創作活動は生徒の興味・関心・意欲を引き出しやすいと考える。感想の中には「苦手意識のある古典だけど，脚本を作ったり自分で物語を作ることで，楽しく内容が入ってくるなと思った。」「ただ内容を理解するだけでなく，自分で実際に物語を作ったり，その人になりきる機会をつくることによって古典の物語の魅力に気づけたと思いました。」というものもあった。このように創作活動を通して古典や物語そのものの面白さに気付く生徒もいる。このことから創作活動は我が国の言語文化に親しむ態度を育てることにもつながると考える。

実践ア～ウからこのような姿が見られた一方，実践エでは故事成語への関心は高かったにもかかわらず，実際に体験文を書く活動ではほとんどの生徒が書くことができなかった。苦労している生徒達に便覧の用例などを示しながら，自分の体験に当てはまるものはないかと問いを重ねながら活動を支援したがなかなかピンとくる様子はなかった。活動に苦労していた生徒は実践ア～ウでもいたが，苦労しながらも楽しみ，なんとか自分なりの文章を書き上げている生徒が多かった。実践アの事例を挙げる。活動に苦労していた H さんは 4 時間目で扱った二位殿とは違う登場人物を選んでいた。どう書くかが全く分からない様子だったので，現代文をベースにして，文の間に「ここはど

んな様子だったんだろう」と情景や心情を想像して入れていく形にしてはどうか，と声を掛けた。現代語訳をベースにするというのがわかりやすかったのか，その後書き込み始めていた。

【作品】Hさん
新中納言は
「見なければならないものはみた。今は自害しよう。」
といい、死ぬ覚悟ができていた。
乳母子の今賀平内左衛門をよんで
「約束を覚えているか」
と言うとすぐに
「言うまでもありません」
といい中納言に鎧を 2着着せた。
自分も鎧を2着着て手を組んで海に入り、死んだ。
その時の海の様子は波が激しく荒れていた。
その様子をみて、侍達二十人余りが遅れないようにと同じように、手に手を組んで、同じ所の海に姿を消していったのだ。
死ぬことに対しての恐怖感はなかったようにみえる。

【作者コメント】
海に飛び込むことも、死のうとすることも怖かったり勇気がいることなのにあまり抵抗なく海に姿を消していくところが印象的だった。その時の海の様子を想像して書いた。難しかった。

作品には現代語訳をほぼそのまま使っているが，訳にはない海の描写や，入水するときの登場人物の様子を想像して書き込むことができた。最後のアンケートでは「難しかったけど最後まで書くことができた」と自身の達成感を述べていた。

実践ア～ウと実践エでこのような生徒の活動の差が生まれたのは，創作活動の種類の違いによるものと考えられる。実践ア～ウでは読んだ物語をベースに文章を考えることができた。しかし実践エでは「矛盾」をつかって矛と盾を売る商人の話を膨らませて書くのではなく，自分で故事成語を一つ選び，ベースが無い状態でゼロから自分自身の体験を基に書かねばならなかったため，生徒にとってハードルの高い活動になったと考えられる。このように創作活動にも種類があり，生徒の段階によっては活動ができないことがある。そのためただ創作活動を行えばよいというわけではなく，生徒の実態や力に合わせて創作活動の種類を考え，活動に至るまでの道のりを慎重に検討する必要があると考えられる。

５　本研究の成果と課題

本研究では登場人物の心情や描写に注目した現代語訳ベースの創作，原文から心情や描写をわかりやすくした脚本，学習内容を踏まえた続き物語，故事成語の意味に当てはまる自分の体験談，この四つの創作活動を行った。この実践から創作を用いた古典学習は生徒の古典に対する自由な考えを尊重しながら，生徒自身が古典作品に注目し，心情や背景，情景描写などに注目して深く読み込んでいくことにつながると考えることができる。このように創作活動は古典の学習において有用であるが，創作活動の内容と生徒の実態を踏まえた授業展開を行わなければ生徒は十分な学びを得ることができないこともある。また創作は全ての古典作品で扱いやすいとは限らないため，教材研究も重要であると考えられる。

これからの課題は創作活動を古典に限らず様々な領域で活かしていく方法を検討していくことである。実践ウのように創作活動は古典に限らず様々な領域で使える活動である。古典，現代文，そしてそれら両方の接続を意識した学習活動として創作活動の可能性を明らかにしていきたい。

注

1)梶原正昭（1981）が早稲田実業高等部3年生を対象とした講演の中で述べた内容。「想像力をはたらかせて，その言葉や表現の重みをしっかりと受け止め」，「“なにが”書いてあるより“いかに”書いてあるかに心をとめることが大切だ」と述べている。

引用・参考文献

浅田孝紀（2018）「言語文化教育の道しるべ」，株式会社明治書院.

中央教育審議会（2018）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習須藤要領の改善及び必要な方策等について（答申）」，文部科学省，中教審第197号 p. 124.

今井清光，沖奈保子(2017)「すぐ実践できる！アクティブラーニング高校国語」，学陽書房

大滝一登，幸田国広(2016)「変わる！高校国語の新しい理論と実践」，大修館書店.

田山地範幸(2022)「『伊勢物語』『芥川』の書き換えから見えてきたこと」，国語科教育研究，第142回東京大会（オンライン）研究発表要旨集 p. 165-168.

The Usefulness of Creative Activities in Japanese and Sino-Japanese Classics Class at Senior High School

Haruna　ABE